

啐啄同機



大阪市立榎本小学校
11月6日
NO. 9

人の役に立つ

8号で「なぜ学校で勉強するのか」を学級開きで子ども達に話すと書きました。いつも3つの理由を挙げていました。

一つ目は、自分の才能を見つけるため。これは前号に書きました。

二つ目は、夢を実現するため。

三つ目が今回のテーマである「人の役に立つ」ためと説明していました。

クラスでは、ドラえもんの話を使っていました。
「ドラえもんに独裁者スイッチというアイテムがあるのを知っていますか。自分以外この地球上から全員いなくなってしまいます。もしうなったら生きていけますか。誰にも期待されず、だれにも相手にされない。そんな中で生きていけますか？」

「生きていけない」子ども達はみんな言います。

「人のためになる、人の役に立つことをするために勉強するのです。」

そう話していました

後に「人の役に立つ」というのは、人間の本能に根ざした願望であることを知りました。

それは、自身の闘病生活をまとめた「1リットルの涙」の著者である木藤亜也さんの母親である潮香さんの著書で紹介された亜也さんの日記にありました。

亜也さんが車いすで出かけたある日、怪我をした子どもに出会います。彼女はその子に、持っているばんそうこうをあげました。

たったそれだけのことですが、亜也さんは「人の役の役に立つことができ」と興奮し、大喜びしたそうです。

体が不自由だからこそ、誰かに親切にできたことが、一層うれしく感じられたに違いありません。人に親切にされるうれしいものです。人のために何かできるという喜びはさらに大きなものだと気づかされました。

今年のノーベル賞に二人の日本人が選ばれました。研究の当初は、「何の役に立つか？」
「そんなことは無理だ！」などと非難されたということです。この研究は必ず役に立つ、人類のためになる。そう信じて研究を続けたに違いありません。自分のためだけなら、商売に結び付きやすい研究をしていたと思います。人の役に立つと信じるから何度もまくいかなくとも挑戦を続けることができたのだと思います。

稻盛和夫氏は、新しい事業を始める時に次のように自身に問いかけたといいます。

「動機善なりや、私心なかりしか」

大きな事を成し遂げるためには、私心で初めてはならない。人のため、社会のため、そういう思いで始めなければうまくはいかない。大きなプロジェクトをいくつも成功させた稻盛氏の話には力があります。

校長 篠崎 勇

